



旧文学部跡地付近 現パークロード（美術館前）



第 19 号  
発行・鴻文会

山口大学 文学部 文学科  
人文学部 同窓会  
山口大学人文学部内  
電話 (083) 933-5200

(連絡事務所)  
山口市平井773-2  
沖田ビル202

電話・FAX  
(083) 928-4527  
郵便振替口座  
01500-4-15902



ご挨拶

鴻文会名譽会長 田中 晋

会員の皆様にはご清祥のことと存じ上げます。私こと、今年四月より、はからずも人文学部長を仰せつかり、この度また鴻文会名譽会長をお引き受けすることとなりました。まだ「名譽」という名の肩書きを頂戴する歳でもないのにと面映ゆい気が致しますが、伝統ある鴻文会のため、母校のために微力をつくしたいと、あらためて思う次第であります。

さて大学はいま激震の時代といわれ、二十一世紀を迎えるに当たって大学の将来が性急に決定されようとしております。行財政改革からんでの国立大学独立行政法人化が問題となり、独法化ともなれば勢い効率が重視され、実学的要素の少ない人文系基礎学の存立が危うくなることとが危惧されているところであります。

我々人文学部の学問は、人間の精神活動とその所産である文化を研究するものであり、豊かな人間性を培うことを目標としております。この学問分野をないがしろにしては、二十一世紀は転倒するでありません。このことの意味を今一度考えて見たいと思います。

二十世紀はやがて終わろうとしておりますが、それはただ世紀の交替だけではなく、実はルネサンス以来の近世文明の終焉を意味しているのであります。神中

心の中世から人間中心の近世文明へ展開したことは大きな意義があり、特に自然科学の発達は驚異的な成果を収めました。その結果、機械文明の過度の発達により、一方には自然環境の破壊があり、他方には人間性の頹廢が結果しました。この危機を救うには人間本来のあり方を反省することが急務であります。古来言われるように人間は天地の化育に参ずるものであり、天文・地文に対する人文の意義はこの所以を説明するにあると思えます。ここに意を留め、このことを訴えてゆくことが現在の時流における我々の使命でありましょう。

昭和二十四年、山口大学文学部文学科として発足以来、先人のご尽瘁により培われてきたお蔭をもつて今日ある人文学部の歴史を顧みると、我々はその在り方を一層充実させ、以て社会の要請に応え得るものにせねばならぬ責任を感じます。それを果たすべく目下様々に検討中ではありますが、これについては別に報告の機を得たく存じております。願わくば、同窓諸兄弟のご協力をいただき、手を携えて新しき人文学部の道を探りたいと念じております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

(英米文学・文理第十四回卒)

## 二〇〇〇年の節目に当たって

鴻文会会長 有馬 正人

開学50周年を期して廣中中学長の発案により縦割り組織であった鴻文会、鴻理会(理学)、鳳陽会(経済)、時雍会(教育)、常盤工業会(工学)、霜仁会(医学)、農会(農学)、双樹会(医療技術短大)の八の組織にブリッジを架け、「連合同窓会」が結成され、山口大学の「同学意識」を醸成することになりました。

我が鴻文会として大変なことはこの連合同窓会の初代会長に私が選任されたことです。私と云うよりも鴻文会が指名されたのであって、誠に名譽なことだと痛感しています。因みに副会長は鳳陽会小野喜孝氏、監事は霜仁会の廣石輝男氏、農会の田中秀平氏、顧問に廣中平祐学長、当会副会長の岡光一浩氏は理事を務めて頂くことになり、その他理事として時雍会真田元祐氏、鴻理会富永和信氏、霜仁会藤野巖氏、常盤工業会佐々木孝治氏、農会田中敏正氏、双樹会米田純子氏と云う役員構成でスタートすることになりました。

連合同窓会の船先(ヘサキ)として先頭に立つことは大変な名譽な事でもあり、我が鴻文会としても大いにその存在を全学に認識して貰うためにも喜ばしい事です。

あります。

この新生連合同窓会の大事業は、何と云ってもいざれ押し寄せてくる「国立大学のリストラ」に備え、「支援財団」設立の仕事です。この事業は全学の力を結集して実現しなければならぬ事業であると思っております。この事業を推進するに当り、鳳陽会、時雍会、霜仁会、常盤工業会のように「社団法人」や「財団法人」といった「法人格」のある強大組織を糾合してそのリーダーとして財団設立に奔走しなければならぬ立場を考えると慄然とせざるを得ません。

「募金目標は二億円、平成12年3月末」という方針を掲げ、精力的に活動を展開しなければならぬのは大変な仕事であります。

全学の卒業生数約6万名若、理屈の上では一人万円づつ募金すれば悠にあつま「皮算用」となりますが、現実にはなかなか簡単には行かないと危惧しているところではあります。特に現在の長期に亘る経済不況、吹き荒れる「リストラの嵐」の中でOBの皆さんが快く浄財を提供してくださるかどうかが甚だ不安です。

前述の「法人格」を有する大型組織で

は既にある程度の資金を保有しています。我々は全て会員各位のポケットから提出しなければならぬ立場です。鴻理会も恐らく事情は同様でしょうが、我々としては会員の皆さんの「愛校の志」に俟つより他に術がないのです。願わくは「小」なりと云えども我々の意志を結集して恥ずかしくない成果を残したいと念願する次第です。

どうか鴻文会会員の皆さんの絶大なるご支援ご理解を懇願致します！

もうひとつ皆さんにご報告したいのは「事務所」の問題です。前会長の大家博

久先輩、鴻理会前会長原田義博先輩のご尽力により我々の悲願であった事務所を大学前の適地に設けることが出来、専従職員(パート)を置いて両同窓会が互いに有効に活用していますが、この度連合同窓会設立に当り、この事務所として大学事務局より「同居」の申し入れがあり、

鴻文会・鴻理会の各々役員会で了承し、専従職員として本学人文学部卒業生の木原理恵さんに常駐していただくことになりました。

鴻文会・鴻理会共有の事務職員として執務している小野文史と合わせ二名が常駐することになるので事務所の利便性は向上されることとなります。

この連合同窓会事務局は「募金活動」が完了しても恒久的に永続する旨は連合同窓会役員会席上で大学当局と各会役員とも確認しているところです。

連合同窓会はその本来の目的は本学八組織の連携と協調を維持するための母体

であり、支援法人の募金のための組織に終わらせてはならないと思っております。大学本部と各同窓会を繋ぎ合わせる「掛け橋」として将来とも機能して貰いたいと念願しているところです。連合同窓会事務局は当初学内に設置を検討していましたが、文部省の規制により学内立地は不可能ということで現在の鴻文会・鴻理会の事務局が大学に至近の位置にあり、機能的にも最適地ということ被我が方に「同居」の申し入れをすることになった次第で、結果的には最良の選択であったと思っております。

云うまでもありませんが、事務所家賃も連合同窓会にも応分の分担をしていただきますので、鴻文会・鴻理会共に経済的にも助かることになりました。

会員諸兄弟も大学付近においてになったときは遠慮なく立ち寄って頂きお茶でも飲んで頂ければ幸いです。

「みんなの事務所」でありますから有効に活用して頂きたいと思っております。10から12名位ならミーティングや会食も可能であるし、加えてパソコンのホームページも開設していますので積極的にアクセスして頂ければ楽しいのではありますまいか。

(<http://www.sv.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~kbk/kobunkai.html>)

なにはともあれ我が母校山口大学のために会員の皆さんの「支援法人設立」に最大限のご協力とご支援を頂くよう重ねてお願い申し上げます。くれぐれもよろしくお願い致します。

「大学改革」が叫ばれ独法化も間近い中、山口大学でも、応用系・理系を重視した学部再編までが構想されています。人文系学部の在り方を考えるべく、人文

学部では、七月二日に九州大学名誉教授中野三敏先生をお招きして講演会が開催されました。先生は、アメリカと比べた人文系の学問領域における研究教育の劣悪な状況について、その打開を訴えられました。日本の人文系の研究・教育はだれが支えるのでしょうか。低い研究費をアメリカと比べるとそれはまさに大戦中の竹槍に等しく、文系基礎学の冷遇は「用のない」文系中心に行われた学徒出陣さながらです。目的が戦争から経済効率に変わったにすぎません。ここに講演演を抄録いたします。

## 人文系学部の在り方

九州大学名誉教授

中野三敏

本日はお招きをいただき有難うございます。殊更「人文系学部の在り方」などをお話し申し上げるのは、釈迦に説法の図で恐縮いたしております。

実は私、廣中学校とは昨年山口大学でお会いし、この問題についてお話し申し上げる機会がございました。その際痛感しましたことは、廣中先生や東北大学の西澤先生とか、理系の先生方の賛同が不可欠ということでした。人文系の学問領域にも愚直に「守る」べき財産がございます。理系の先生方の共感の有無は、こ

の点の社会の理解を左右すると存じます。私は文系の学問には理系の学問の基礎でもあると信じております。

### 一 文系学部の現状

これまで世間にアピールすべく幾つかの行動を起こしました。岩波の「ブックレット」に執筆したこともその一つです。内容を簡単にご説明いたします。

お手元の資料1は、アメリカの大学の日本語日本文学の研究の状況、そのための予算の実態を示したものです。一九八七年、カリフォルニア大学バークレー校は、日本の国語国文学に比すべき英語英米文学の予算が五二八七万円ありました。日本語図書は購入冊数が五八九〇冊。日本はと申しますと、一九八九年、九州大学の国語国文二講座で二六六万円、三〇〇冊です。金額、冊数ともなんとカリフォルニア大学バークレー校の二十分の一です。貧弱さは目を覆うばかりです。一年に発行されている日本文学関係の研究書の総額は、「国文学研究資料館」の年鑑で見ますと、一九九三年、九六年を平均して大体一三〇〇〜一四〇〇万円ぐらいになります。日本の大学などではこれらは蓄積されて当り前のはずですが、自国の図書なんです。しかし、九州大学の講座費は一九八七年の時点から自慢ではありませんが不変です。蓄積など、どここの国の話でしょうか。国家予算の総額の差はあります。それでも自国の図書なんです。国立大学を国が作って研究と教育を行っている以上、蓄積は国の義務のはずです。はっきり言って日本の文教行政はその義務を果たしていません。

研究に必要な最低限のお金は国はちゃんと出すべきではないでしょうか。

学生が、勉強に困らないだけの書物は揃えるのは当然のことです、ないのがおかしいわけですが。ところが、ここ二十年、私の専門の江戸文学関係は講座費を使つて本を購入したことは一度もありません。お金がないからです。なけなしの一三〇万円は、ほとんど継続図書や雑誌の購入などに使われます。江戸文学関係の本は仕方なく自費で買います。平安文学関係はそれが専門の助教授がこれも自費で買います。そして、それらを学生に読ませます。中には近代をやる者、中世をやる者、万葉集をやる者もいます。それらには応えられません。大問題なのは、指導教官はやがて退官することです。寄付しないかぎり、その分野の本はごっそり消えてしまいます。気の毒なのは学生です。まさに瀕死の国語国文研究なのです。

それと、国立大学文学部の学科の一覧表がございました。文学部で一般的だった「哲学科、史学科、文学科」という学科名が、平成7年までに激減しています。今年まだ残っているのは三大学だけ。九大も近々変わるようです。哲、史、文は壊滅状態にあります。内発的な理由があつて名称を変えたものではありません。守るべき「学問の中身」は変えませんが、名称はほとんど「世を忍ぶ飯の姿」として変えたものです。

### 二 如何に文部行政はあるべきか

ここに日本の文部行政の問題点が集約されています。文系の学問に対してかく

も予算が少ないのは何故でしょう。予算の配分が土木事業と同じ方式になっているからです。橋をかける農地の整備をするなど新規なことには予算をつけます。去年と同じ事業には去年と同じ予算額なのです。大蔵省側はこの点は頑として譲りません。傾斜配分というものもありまして、業績が上がったものにはドンと予算をつけ、去年と同じことだと去年と同じ額しかつけません。応用系の学問は当然新しいことをやります。新しさが生命です。しかし、文系や理系の基礎的な学問は本来変わりようのない学問です、変わらなければ予算は増えません。一講座一三〇万円が十数年も続きます。文部省は「大蔵省の財布の紐がゆるむように知恵を」と申します。教官会議では脂汗を流して知恵を絞ることになります。挙げ句「名前を変え」ます。名前を変えるのが一番変わったように見えます。名前を変えないことには変わったと認識しにくいわけです。中身は変えずに「世を忍ぶ飯の姿」として名前を変える。一時的にせよお金が増えるのならそれでいいやと思つてしまふ。「中身は変えない」ことは教授会で申し合わせます。しかし、大学の先生というのは退職をいたします。その時のメンバーは十年でガラッと変わります。後から来た人はその申し合わせを知りません。当然名称に相応しい組織に近づきます。またそうしないと詐欺です。

ある大学では国文学は地域文化課程に属してあります。この名前では、申し合わせが忘れられると後任の国文の先生の採

用は保証のかぎりではありません。イスラムや東南アジアの文学の方が相応しいかもしれません。国文科消滅の危機はもう目に見えています。

現在の文部行政は基本的に理系・応用系を重視しています。文系・基礎学系に相応しい予算編成の方針も考えたダブルスタンダードが必要です。大学の教官にはこれをアピールする義務があります。予算策定方針を変更するととなると国会の予算委員会などで問題になります。問題意識のある代議士さんにレクチャーする必要があると思います。学生を育て高度な社会人を育てる、そのための投資としてきちんとした予算をつけるべきだと積極的に要求していくことが大事だと思います。そういう予算配分方式の見直しこそが本当の大学改革でしょう。我々の学問はやり始めてたつた一〇〇年しか経っていません、研究の対象も二〇〇〇年、三〇〇〇年からのことをやります。それを一〇〇年くらいで変える、そんな柔な学問ではないはずで。

教育にはお金が必要です。まず本を買う、「蝟壺」で教育するためにです。蝟壺を掘ったり重箱の隅をほじくることは大事なことです。重箱の隅をつついてついでと開いた穴の向う側に風景が広がります。それが学問の意気込みなのです。学生には重箱の隅のつき方を教えてあげなければいけない。それが教育だと思っています。科学研究費もありますが、多くは個人研究のためのものです。しかも、多くが旅費、食費などに消えます。先生方の中には「自分の研究ができれば

ほかには言うことはない」と考える方もいらつしやるかもしれません。しかし、講座費こそが学生の教育のために不可欠なお金です。

### 三 文系学部は財産です

私たちはどうしたらよいのでしょうか。まず、名前を変えてなにがしかのお金を予算を増やすような場当たりの対応はやめましょう。必要なのは根本的な解決です。私どもは、中古、中世の文学会はか全部で一〇の学会で「日本文学関連学会連絡会議」を作り、声明文を出しました。三年かかって漕ぎつけました。平成11年3月13日に文部省の記者クラブで記者会見をし、有馬文部大臣にもこれを説明いたしました。文部大臣は、「この声明は絵花的で何々をやってくれという、もつとピンポイントの要求を出さない」とのこと。重点要求は「大蔵省の予算策定方針のダブルスタンダード化」です。この主張は日本文学関連学会連絡会議だけがやっても力になりきれません。パイの吊り上げと痛くもない腹を探られます。

これはお願いです。日本文学関連学会連絡会議は柄にもなく旗を振っておりま。哲、史、文、理系を含む基礎学全般にわたる諸学会の賛同が力になります。連絡会議でこの声明文を出したことに關する集まりを開きました。大変有り難いことにフランス文学会、英文学会、英語学会などが早速入会なさり、ご出席くださいました。倫理学会、哲学会、そういうところからも賛同の気持ちはいただいであります。この秋ぐらいに哲、史、文の全体の学会にこれをアピールするつも

りしております。これを持って文部大臣にお願いに参ります。そのほか、理解のある代議士さんに依頼して、予算委員会で「国立大学の予算は年間一三〇万だそうですが、本当にそれでいいんですか」と質問してもらいます。それでいいぶん違はずです。予算策定方針が変われば、変な「大学改革」はやらないで済みます。

この状況を打ち破るために必要なものは何かと申しますと、もう一つしかありません。要するに、当事者の大学の先生が声を上げること以外にはもう道はないと思います。群れをなして何かするというのは嫌です。私ども群がって何かを言うというのが嫌なばかりに皆大学の先生になっている。それはよくよく分かります。しかし、やはり言わなければいけない時には言わなければいけません。しかも、当事者なんです。当事者が言わなくて誰かが言ってくれましょうか。私は人様からも三〇年遅れの人間と言われるくらいで、大学紛争の頃には全くのノンポリでした。しかし、出来るかぎりのことはやってきましたつもりです。今後もやっていくつもりです。日本文学関連学会連絡会議などいものもできるだけに推し進めていこうと思っております。しかし、一番大事なのはそれぞれの先生方が現状というものによくよくご理解いただいで、それぞれが声を上げる、仕方のないことだですませないでいただきたい、そのことです。

今日はお招きいただき、拙い話にお付き合いただきありがとうございます。

## 新任教官の紹介

よろしく願います

藤永康政

(歴史文化・講師)

この四月より、歴史文化論コースで、アメリカ史の授業を担当しております。専門の分野は、二十世紀アメリカ系アメリカ人の思想史・運動史です。これまでの業績としては、一九一七年に始まる黒人人口の北部都市への「大移動」期から、第二次世界大戦中の銃後の社会における黒人（アフリカ系アメリカ人、アフリカ系西インド諸島出身移民）の思想・運動を扱った論文しか発表していません。しかし、今現在、またこれからしばらくの間、研究の焦点は、「人種」に関する言説、アフリカ系アメリカ人の社会的・経済的・政治的環境を、それまでのものとはまったく違うものにしてしまった、おそらくは二十世紀最大の市民運動と言っても過言ではない、一九六〇年代公民権運動に絞っていくつもりです。その中でも研究の空間として今のところ考えているのは、北部都市におけるアフリカ系アメリカ人の運動、ならびに「黒人」知識人の思想・戦略です。日本における「黒人研究」の多くが、南部を焦点としたものであり、現在、私の限られた人脈の中では、同様の課題を持って「黒人研究」に取り組んでいる者は、東京大学大学院生に一名、慶応大学大学院生に一名

いるのみだろうと思っ  
ています。(もしどなたか他に右のような関心を持っていらっしゃる方をご存じでしたら、是非、是非、教えて下さい。)

私の経歴を申し上げますと、学部では神戸市外国語大学で文学、大学院では東京大学大学院地域文化研究科でアメリカ研究、およびシカゴ大学大学院歴史学部で合州国史を学んできたのですが、山口県は、実は、私の故郷です。現在も両親は美祿市に住んでおり、私は、当時の共通一次(現在のセンター試験)を山口大学の常磐キャンパスで受験しました。これまで「教える」立場にたった経験は東京近辺の諸大学で非常勤講師として勤務したのみで、常勤では山口大学が初めての赴任地になります。ヒトの最も古い記憶がだいたい三歳ぐらいから始まると考えて、山口県に十五年、神戸・大阪に七年、東京に五年、シカゴに二年で、山口県外にいた累積年数が十四年となり、山口方言もほとんど忘れてしまっています。まだまだ教官としては未熟で、これから学ばねばならないものが沢山ある一方、関西弁と東京弁と英語が混淆した奇妙な言葉で話しをすることになってしまっています。ですが、どうぞこれからよろしくお願います。

### 人文学部に転任して

辻 正 二  
(社会情報学・教授)

この4月に経済学部から人文社会学科

社会情報論コースに移籍してまいりました。新任教官としては変わった経歴の教師ということになるかと思えます。私は、山口大学には平成3年4月に宮崎大学から教養部に移ってまいりました。教養部は林雅孝先生の後任です。その後、教養部改革によって経済学部に分属し、この4月に小川全夫先生の後任として人文学部に移籍したわけです。因みに、経済学部では経済政策講座に所属し、地域福祉社会学と社会病理学を担当し、その他ゼミ・外書講読を担当しておりますが、結局3年の在任でした。今年いっぱいには経済学部の私のゼミ生の卒論指導が残っています。

人文学部での担当科目は、このところ就職する学部の要請で、授業科目が変わっていますが、現代社会意識論、社会心理学概論などを担当しています。専門は、社会病理学、社会学史、福祉社会学の領域を専攻しています。もともと大学院を出てしばらくアメリカ社会学の理論(RKマートン、逸脱行動論など)を中心に研究していましたが、最近が高齢者問題や社会問題(逸脱行動など)などを実証的に研究しております。その他では、地域の要請で研究するようになった福祉や村おこしなどの研究に関心があります。地域で人々が抱えている問題を解き明かし、それを解決する手立てを提案するという、やや実用的な地域研究です。社会学という学問は、政策的課題への提言が出来るような学問でもあるべきだと思いますので、今後もこの種の研究は継続してやっていきたいと考えています。こ

一、二年はこれまで書いてきた論文をまとめ、次の段階への一歩にしたいと、目下作業を進めているところです。大学改革の時期、私なりに出来る範囲で役立ちたいと考えていますが、学生への教育の必要性を痛感しています。同窓生のみならずには、いろいろと大学への協力を宜しくお願いします。

### 人文学部に赴任して

坪 郷 英 彦  
(社会情報学・教授)

10月1日付けで人文社会学科社会情報論コースに赴任してまいりました。前任校の東京家政学院大学は小さな女子大学で家族的な教育環境でしたので、山口大学の全体構成の大きさ、学部構成員の多さに驚いています。出身が防府市ですから山口大学は身近な存在でしたが、なにより関係は山口県庁に勤め始めた頃から当時の教養部人間環境論講座にいらした高桑守文先生を中心とした常民文化研究会に参加したことです。高桑先生の後、湯川先生、県立大に移られた安溪先生にもお世話になり、民俗学の知識・考え方を深めることができました。もう一点のつながりは県庁時代に社会学研究室OGの女房(前田鹿都江、第26回・昭和53年卒)と結婚したことです。故山本陽三先生のフィールドワークの話の聞いたり、木下謙二とお話する機会があったりとわずかな社会学の知識を得たのもこの頃でした。

専門は物質文化論であり、生活全般にわたる「もの」と人及び社会の関わりについて研究しています。特に日本の民家・民具・民芸を対象領域としてフィールドワークを基にした分析を行っていますが、最近では空間の認識のされ方の変化、スキル(手仕事)が果たした役割の現代的再評価について関心を持っています。大学は日本で一番小さい国立大学、九州芸術工科大学で工業デザインを学びました。「もの」の提案についての教育を受け、次第に「もの」と「ひと」の関係に関心が移り、現在は「ひと」に重心が移っているわけですが、一貫してデザインの考え方は工学・芸術系だけのものではなく広く一般の教養として身につけるべきだと考えてきました。一口でいえば物事の機能や関係性に注意を払うこと、わかりやすく人に伝える方法を考えることの2点です。このデザインの考え方の一端を教育にも生かしたいと密かに考えています。

### 赴任にあたって

宮 原 一 成  
(比較言語文化・助教授)



この四月より英米語文化論コースに職をいただき、英国小説を中心とする授業を担当しております。これまで中高一貫校の英語教諭、そして国立高専の教官を通算十二年間務めて参りました。この度ついに念願かなって、自分の関心分野に直結する内容で教

壇に立てるようになり、毎日嬉々として大学に通っています。

昨今は英語関係の教育分野でも「異文化交流」「コミュニケーション」等の言葉がもてはやされ、腰を据えて文章を逐語的読む姿勢は軽んじられる風潮があります。しかし、自分とは違った体験世界を持つ人が、一字一句に精魂込めて綴ったものを丹念に読み取っていく行為は、まさに最も深い異文化交流の一形態であり、静謐に心奥を汲み上げるコミュニケーションである、と私は考えています。皮相を撫でて過ぎるような浅いかかわりからは味わうことのできない、ずしりとした手応えの人間理解が文学にはあります。希薄な人間関係が種々の問題を生んでいる現在にあって、文学読みそして人文系諸学の必要性はきわめて高いと思うのです。

山口大学の人文学部を志望した学生には、自分の選択に誇りを感じて欲しいと思います。そして私も学生の期待に応えるため、これまで以上に研究・教育に精進してゆく所存です。また、迫り来る大学制度改革の波の中でも、人文学部の学生に学問の愉しみを保障できるように、微力を尽くしたいと思っています。

### 疾風怒濤期を終えて

坂本 貴志

(比較言語文化・講師)

この四月から独仏語文化論コースにて

ドイツ文学の授業を担当しています。専門は近代ドイツ文学(ゲーテ・シラーを含む啓蒙主義期)で悲劇文学の研究が主です。近代悲劇の可能性をポストモダンまでの思想状況を踏まえて探求することに目下取り組んでいます。

山口に住むのは初めてです。幼年期を佐世保で、青年期を東京で過ごし、初めての田舎暮らしに慣れないことも多いですが、不便を感じるのは交通くらいでしょうか。公共のバスがもっとあれば良いのですが。温泉街に住むのは何だか不思議な感じがします。旅行先にあるのか、それともこれは日常なのか、と。むろん温泉につかるのは楽しみです。湯田の歓楽街も給料日からしばらくの間は、僕の関心の的です。終電を気にせずに酩酊できるのは山口ならではの醍醐味でしょう。旨い地酒、温泉、四方を囲む美しい山並みに澄んだ樫野川、そして良き先輩同僚に恵まれて、山口は私の研究環境として申し分のない所です。

山口の学生について言えば、自分自身もついこの間まで学生であったにも関わらず、既に世代の違いを意識せざるを得ないようです。学問に臨む態度を見るにつけ、僕の不満は小さくありません。アナクロニズムであるとは承知の上で、ドイツ語とドイツ文学がその精神的支柱であった旧制高校の蛮カラ・バーバリズムをモットーに、知的憧憬とパトスを併せ持つ人間の教育形成を目指して、これから先この山口大学で努力していきたいと思っています。

### ある女子大生の会話



島 越 郎  
(言語情報学・講師)

「ねえ、ねえ、多佳子、知っちゃよ? 英米文化論コースに新しい英語学の先生が来たんだよ。」

「知っちゃよ、知っちゃよ。珠実の好きなダウンタウンの浜ちゃんみたいな顔しちよる先生やろ。」

「そりゃあ、浜ちゃんに失礼やろー。私に言わせりゃー、南こうせつ。なんか、仙台にある東北大学から来たみたい。でも、生まれは富山県とか言いつつたよ。今まで広島宮島より西に行ったことがないらしくて、中国地方と九州地方の県名を全部言えるかどうかも怪しいみたい。」

「それでよくもまあ、大学の教師になれたもんじゃね。私なんか、公務員試験の勉強のために、各都道府県の県庁所在地もぶち覚えたんやけー。私の方がよっぽど賢いつちゃ。ところで、どんな授業しよるん?」

「うーん、なんか、英語の受け身文の構造を、カモメみたいな変な記号を使って説明しよるんよ。」

「何なん? そのカモメみたいな変な記号って?」

「なんじゃったけー、えーと、そうっちゃ、樹形図とかなんとか言う記号なんやけど、それを使えば人間が話す全ての言

語の基本的特徴を明らかにすることができると。」

「でも、そんなやつってどういうメリットがあるん?」

「なんかね、人間が生まれながらに持っている言語能力を解明したいんて。」

「ますます、言っちゃよることが分かるん。」

「やけえ、例えば、私ら日本人って中学、高校、大学と結構長く英語を勉強するけど、アメリカ人みたいに流暢にしゃべれんやろ。やけど、日本語やったら意識的に努力せんでも子どもの頃から話せるやん。やけえ、どんな言葉でも、人間はそれを使う能力がもともと頭の中に備わつちよると考えるんよ。んで、その能力が日本語の環境に接した場合自動的に日本語を扱う文法になるし、また、英語の環境に接すると自動的に英語を扱う文法になるそ。じゃけー、両親が日本人やけどもアメリカで生まれ育つたら、日本語は話せんけど、英語がペラペラになるやろ。」

「ふーん、何か、分かるようで分からんような…」

「まあ、私自身もこれ以上詳しいことは知らんけー、説明はできんのやけど…;そうじゃ、これから共通教育棟の3階にある鳥先生の研究室に行つてからもっと詳しい話を聞いてみん?」

「まあ、どうせ今日の午後バイトもなければ暇やし、ちよつと行つてみようやあ。」

## 五十年前をふりかえる

大野光生

今年、一九九九年は山口大学開学五十年でした。もうそんなに時が流れたのか、という気持ちになったのは、私だけではありますまい。この年になると、時間に加速度がついたように感じることがありますが、開学当時のことを記憶されている方々はみんなそうではありませんまいか。

私が入学したのが、一九五二年の四月のことでしたから、開学四年目だということになります。その六年前の八月に、日本は太平洋戦争に敗北し、国家存亡の危機におかれていました。一九四一年の暮れもせまってアメリカ、イギリス両国に宣戦布告をし、四年間の戦いでした。その四年間で、明治以来、嘗々として築き上げてきた国力をいっぺんに消耗しつくしてしまいました。すんだことですが、惜しいことをしたものです。

占領軍の施政の中で、農地改革とともに、最も大きな改革としてあげられるのが教育制度だったでしょう。新制度が発足したのが、敗戦の翌年、私たちは従来の教育制度で、小学校から中学校に入学して間もなくのことでした。義務教育が中学校まで延長され、新制中学校が生まれました。それとともに、私たちの入学していた中学校は高等学校となり、従来の高等学校や専門学校がす

存在していた大学と並んで新制大学となったのです。山口高等学校が山口大学文理学部となり、師範学校が教育学部、経済専門学校が経済学部、工業専門学校が工学部というふうになりました。

当時、私たち国民の九十九パーセントの人たちが貧乏のどん底におかれていました。生活に欠かせない衣食住からして、ままならぬ状態でしたから、教育機関のすべてが、土台のない建物に等しく、その中で大学を支えてきた人たちの苦心は並大抵ではなかったはずで、幸い、大

学本部のある山口市は、戦災を免れた数少ない都市でしたから、文理学部も、経済学部、教育学部も、古い専門学校時代の建物が残っていました。私の入学した文理学部は、今、県立山口高等学校のある山口市糸米の地にありました。大鳳が翼を休めたような山容をしたことからその名のついたといわれる鴻の峰の麓に、昔の官立山口高等学校の校舎がそのままあり、校門の柱に山口大学文理学部とまだ新しい表札がつけられていました。入試もそこで受け、学習も官立高校時代の建物の中で始まりました。鴻の峰の南に聳える兄弟山の麓の峠を越えた湯田寄りの朝倉というところにある農家の長屋に付属していた一室で、私の大学生としての下宿生活が始まりました。

た。それが、一九五二年のことです。当時の下宿代は相場が一疊百円ということでした。しかし私の部屋は六疊なのに五百円でした。朝、晩二食の賄い付でしたから、五百円プラス千八百円と米八升持ち込みということになっていました。その家は、代々高等学校の学生や、経済専門学校の学生を下宿させてきたところだったので、その時祖父父母にあたる方はもちろんのこと新しいご夫婦も、学生気質を十分弁えておられ、私をとっても大切に

もてなしてくださいました。一年目の学習は、高等学校の続きのような、一般教養課程で始まりました。教わった先生方はもうほとんど他界されました。英語の川瀬哲三先生のピアス短編集の講読、池本番先生のクリスマスキャロル、緒方英穂先生はゴールズワージー作のプロビデンス、アンド、ギターの講読。数学は中尾先生、憲法は山田先生、美術は教育学部まで足をのばして三好直先生のお話を聞きました。経済学は浜田先生、教育原理は竹井先生に教わったのを覚えています。教わった内容は残念ですが、今ではほとんど記憶にありません。印象に残っているのは、中村勘一先生の体育でした。出来ない逆立ちを何度か何度もさせられました。赤鬼というあだ名のとおり、日焼けした骨ばった顔の面積のわりには眼力がかくあだ名はその風貌と、なさることのきびしさから付けられたもののように思えます。当時の学長は松山基範という方で地球物理の専門家だったことから、先輩が、「あの先生は、引力で飯を食っている」

と言っていました。学部長は漢文学の青木正児先生でした。酒の肴に関して詳しく、とてもいかもの食いの方でした。専門課程で中国学を習いはじめると、早速羽織袴姿の青木先生の講義に出ました。日本の碩学と謳われた先生の詩経の講義には、社会学の近沢敬一先生も聴講されていきました。結局、石黒俊逸先生の門下となつて卒業しましたが、できのよくない弟子でした。昨年、郷里の奈良に、中国文学の上村幸次先生を大塚博久、藤満通両氏と同伴して訪ねました。九十幾つ

になられたという先生は矍鑠としておられました。しばらく近況を報告した後、近くの唐招提寺に案内していただき、昔のままの親切に触れた思いでした。中国学でご健在の先生は上村先生と湯浅幸孫先生だけのようです。教え子の私たちが四捨五入すればみんな「従心所欲、不踰矩」の年齢になったのですから、いたしかたのないことです。中国学を専攻したことで、天命という言葉の本当の意味がわかったのかもしれない。それにしても、「従心所欲、不踰矩」というのは、自分の意のままの行為をしたとしても、矩を踰えることがない、という意ですから、言い換えれば「無力」ということかもしれません。羽目をはずして暮らした山口大学時代が懐かしく振り返りたくなるはずで、今、官立山口高等学校から山口大学文理学部の講堂として使われ、そのままの姿で山口高校の校庭の一隅に記念館として残っている建物の脇にこう

いう石碑があります。

「ああ青春乱舞の地」

刻まれたその文字には、官立山口高校で学んだ方々の、旧き良き時代だった青春を振り返った感慨がこめられているようです。

今年は東西ドイツを隔てたあのベルリンの壁が破られて十年目だといえます。私たちの日本の学生も、思えばあの壁に象徴される東西関係の問題に日常が振り回された時代でもありました。東西問題が存在する限り、日本にも、姿のない壁があったのです。文学部の前身時代の乱舞と、私たち開学当時の乱舞との違い

## 山口つれづれ

渡 壁 忠 紀

○下宿  
孟母三遷という言葉がある。孟子の賢母は我が子の教育環境を考えて、三度住む所を変えたという。私は学生時代、下宿を三度変わった。別に賢くなろうと思っただ訳でもない。

また実際賢くもならなかった。それはともかく、三つの下宿は三つともそれぞれに古都山口の風趣を感じさせる住まいであった。

その中でもとりわけ思い出深い下宿は、通称「香山園下」という所であった。その名前が物語るとおり、「香山園」のすぐ下手にあった。二階建ての離れ屋だった。その二階をAという友人と二人で借

も、その壁によるものだったとも言えます。

入学して間もなく起きた、皇居前のメーデー流血事件、朝鮮戦争の終結、破防法の成立、教育二法など、ことあるごとに、学生は乱舞したものでした。

今は自由主義全盛期とはいえ、もはや次の壁にぶち当たってきたようです。教育のグローバル化といっても、足元をしっかりと見据えなければならぬように思います。後輩諸氏の健闘を祈るばかりです。  
(中国哲学・文理第四回卒)

りた。下には、若い夫婦の借家人が住んでいた。朝起きると、柱に掛けている細長い鏡に、五重塔が映っている。私は寝床に寝そべったまま、それを眺めた。四季により様々に変化する空を背景に、五重塔を觀賞したのである。季節ごとに移ろう塔の表情を、寝そべりながら眺めることができた果報者はそう多くはないだろう。

当時の学生は、概ね貧しく質素な下宿生活を送っていた。盆地の山口は、夏は蒸し暑く、冬は寒さが厳しかった。しかし、当時は暑さを凌ぐためのエアコンがあるわけでもない。夏は窓を開け放ち、団扇で扇ぎ、僅かに涼を求めた。冬は小

さな火鉢に炭火をおこして、二人がそれを囲んで暖を取った。テレビもステレオもない。私とAの二人は無聊を慰めるため、共同で小さなラジオを買っていた。夕方になると、子供向けの番組が始まる。「できた、できた。ほーら、できたよ……」

男性の声で、少しおどけた感じの節回しで、そう言うのだ。毎日同じ時間に始まるので、それを聞くと、ああ、今何時だなど時間が解る。

晩秋のうすら寒い夕方の事であった。その日もAと二人で寝転がってラジオを聞いていた。いつもの通り、子供向け番組が始まった。「できた、できた。ほーら、できたよ……」

聞き慣れた声が流れてきた。と、その時、下の方で、母屋に向かって叫ぶけたまじしい男の声がした。「できました、できました。おくさん、できました」

私たち二人は、何事だろうと思つて、跳ね起きた。声の主は、どうやら階下の部屋を借りている若夫婦の亭主の方らしい。母屋の裏戸が開いたらしい気がして、「おめでとうございます。どちらです?」と言う大家の奥さんの声がする。

「おとこ、おとこですよ」  
興奮と喜びの混じり合った声が、秋の夕暮れの空に響き渡る。そう言えば、階下の奥さんは、身重で大きなお腹を抱えて洗濯物を干したりしていた。Aと私は顔を見合わせた。

それから、大声で笑い出した。何と見

事な偶然の一致であることか。ラジオから「できた、できた。ほーら、できたよ」という声が流れた途端、それに重なって、「できました、できました……」という出産報告の声が聞こえたのだ。

私とAは窓を開けると、下に向かって、「おめでとうございます」と声を揃えて、祝福した。

「ありがとうございます」  
下から、明るい弾んだ声が戻ってきた。Aと私は窓を閉め、顔を見合わせると、ふたたび大声で笑い合った。私は他人事ながら妙に嬉しい気分だった。人間がこの世に生を受けるとはこういう事なのかというような思いがしていた。私は少し感動していたのかも知れない。

あれから四十数年が経った。しかし、学生時代の事を思い起こす時、私の脳裏には鏡に映った五重塔の姿が、きつと甦る。そうして、秋の夕暮れの空に響き渡ったあの出産報告の明るい声が、耳に聞こえてくる。  
(国文学・文理第九回卒)



人文学部棟



# 研究室だより

## 英米語文化論コース

本コースは、大講座制の実施に伴い、以前の英語学と英米文学の2専攻を統合したコースです。学生定員は1学年約30名で、それに大学院生も加えると、ほぼ100名の学生が在籍しています。担当教官は、旧小講座時代の4名に、教養部の改組によって配置換えになった4名が加わり、さらに外国人教師の1名を加えた、合計9名で構成されています。

各担当教官の専門分野・研究テーマは次の通りです。田中晋先生（現在、人文学部長）は、「ルネサンス期のイギリス文学」が専門で、特にシェイクスピア、スペンサー、シドニーなどの劇作家・詩人の作品を研究しています。伊豆大和先生（4年前に旧教養部から移り、現在在学生部委員）は「一九二〇年代から三〇年代にかけてのアメリカ文学」が専門で、特にフィッツジェラルドの作品を扱っています。岩部浩三先生（小講座時代から英語学を担当）は「形式意味論・語用論」が専門で、記号論理の成果も取り入れ、人がどのようなメカニズムで文の意味（命題）を理解しているのかを解明することに取り組んでいます。池園宏先生（和田敏英先生の後任）は「19世紀のイギリス小説」が専門で、特にジョージ・エリオットなどの作品を研究しています。宮原一成先生（旧教養部から移り今春退官された石井勇先生の後任）は「20世紀のイギリス小説」が専門で、特にウイリ

アム・ゴールディングの作品を研究しています。寺田寛先生（旧教養部から4年前に異動）と鳥越郎先生（今春退官された山本和之先生の後任として10月に赴任）は「生成文法の統語論」が専門で、特に「ミニマリスト・プログラム」と呼ばれる最先端の理論的枠組みを用いて、音声と意味を結びつける仲介役を果たす仕組み（母語話者の無自覚の言語知識）の解明に取り組んでいます。ヘンリー・アトモア先生（オックスフォード大学、ケン



授業風景

ブリッジ大学大学院で学び、2年前に山大に赴任）は、イギリスやヨーロッパの歴史に詳しく、特に、19世紀の科学技術の発達と、それが文化や文学に及ぼした影響について研究しています。そして、太田（旧教養部から移って4年目）は「音韻論・形態論」と呼ばれる分野に興味があり、語のアクセントや語形成のメカニズムなどを研究しています。

文学研究は、最も文系らしい学問の一つですが、それに対して、現在の言語研究は理系的なセンスや発想が求められます。よって、表面的には全くタイプの違うスタッフが同一講座に属しているように見えるかもしれません。が、根本的なところで求めているものには共通性がありますし、9名全員が実に仲がいいというのが我がコースの自慢できる特徴です。ちなみに、平均年齢が39歳という、若々しい教員集団でもあります。

学生は、2年生でコースに所属し、文学と語学の両方の授業を受講します。3年生では文学と語学のどちらかの専攻を選択し、本人の興味や教官の専門にに応じて主（副）指導教官が決まり、より専門的なことを学びます。そして、4年生では卒業論文（卒業研究）に取り組みます。なお、本コースの指導は集団指導体制で、学生が特定の先生のゼミに所属するという形は取っていません。

紙幅の都合で、教官の素顔や、本コースで行われる様々な行事や、学生達の様子について、これ以上お伝えできません。ぜひ英米語文化論コースのホームページ等をご覧ください。（コース委員太田 聡）



山口大学創立50周年式典

○旧制山口高等学校開校八十周年記念「講演と鼎談の夕べ」が開催される

旧制山口高等学校は大正八年に開校して今年で八十年を迎えた。それを記念し、十月十二日（火）の小雨降るなか山口市市民会館の大ホールで標記の講演会が催された。我々の先輩同窓会「鴻南会」を中心とする実行委員会の主催であった。

原野和夫「情報革命をどういきるか」  
松野浩二「外からみた山口」

お二人とも旧制山高的の卒業生。時事通信社社長、日立金属(株)社長を歴任された長年の経験から、山口県と山口大学へ厳しい注文と助言の2時間であった。特に、「文系をないがしろにして山大的の未来はない」「学生は高い志を失うな」とのお言葉が胸に深く響いた。ご講演の後、演者と廣中山口大学学長によって鼎談が行われた。なお、翌十三日には懇親会が持たれている。

平成十年度

人文学部卒業生

大学院修了生進路状況

人文社会学科

建設業

トヨタホーム広島、山口セキスイハイム

製造業

フジッコ、中央出版、みなど山口合同新聞社

卸・小売業

富田薬品、ベルファニー、王将フードサービス、ダイキ、トヨタカローラ山口、ダイエー、サンエーインターナショナル、ビブレ、山口日産自動車

金融・保険業

三和銀行、みどり銀行、広島信用金庫、安田火災海上保険、千代田火災海上保険、レイク、しんわ

サービス業

社会福祉医療事業団、特別養護老人ホーム貴船園、財団法人広島市ひと・まちネットワーク、アリストグループ、総合オリコミ社、カクタスグループ、国際観光旅館本陣、愛グループ、ウエップシステム、アルファアミューズメント、大成社、システム・アナライズ・コーポレーション、ホワイトマジック、濱田重工、山口県公立中学校教員

国家公務員

家庭裁判所調査官補工種(佐賀)、入国管理局(福岡)、防衛庁Ⅲ種(海上自衛隊呉地方総監部)

地方公務員

佐賀市役所、長浜市役所、山口市役所、姫路市役所、秋穂町役場、鹿児島県警察、広島県警察

入学年度別学生数

学 科(専攻)	性別	11	10	9	8	7	6	5	4	計
人 文 学 科	男	45	68	43	45	12	5		1	219
	女	56	41	66	65	0	4			232
	計	101	109	109	110	12	9		1	451
言 語 文 学 科	男	34	30	14	28	6	2			114
	女	66	77	87	77	5	4			316
	計	100	107	101	105	11	6			430
人 文 学 部	男									1
	女									1
	計									2
合 計	男	79	98	57	73	18	7		1	333
	女	122	118	153	142	5	8		1	549
	計	201	216	210	215	23	15		2	882
人 文 学 科 研 究 科	男	6	4	2						12
	女	3	8							11
	計	9	12	2						23
地 域 文 学 専 攻	男	2								2
	女	3	3							6
	計	5	3							8
言 語 文 学 専 攻	男	8	4	2						14
	女	6	11							17
	計	14	15	2						31

言語文化学科

建設業

山口中央ホーム、一条工務店

製造業

松岡、ソニー・太陽、学習研究者(鹿児島支社)日之出水道機器、三浦工業

卸・小売業

トパーン、エクセル、ひまわり、エース

交易、メガネの田中チェーン、ベスト電器、ホームワイド、大進本店、トパー

天満屋、島村楽器、トヨタ自動車販売

運輸・通信業

全日空輪、福岡エア・サービス、鴻池

運輸、愛知海運、読売ツアーズ・サポート、

日本電信電話、NHK広島放送局

金融・保険業

広島総合銀行、国際トレーディング、東京海上火災保険、住友生命保険相互会社、福岡すみれい営業センター

不動産業

不動産業

不動産業

フレックインターナショナル

サービス業

大分県公立高校、長崎県内私立高校、学校法人栗本学園、トライグループ、公文

教育研究会、オフィスエーゼット、慶

進塾、九州コンサルタント、マイカル九州

州

国家公務員

税関職員

地方公務員

島根県庁

大学院人文科学研究科

地域文化専攻

京都大学文学部科目等履修生、T.H.K(株)

北九州市教育文化事業団、山口ケーブル

ビジョン

言語文化専攻

大阪大学研究生、山口県教員、新潟大学

大学院博士課程、山口県職員

山口大学 人文学部

公開講演・講座

第十二回公開講演

テーマ ザビエルと山口

とき 平成11年9月11日(土)

ところ 山口市市民会館

共催 山口市教育委員会

後援 山口県教育委員会

受講料 無料

演題 「ザビエル当時の山口の人々」

演題 \* \* \* \* \*

演題 「宣教の思想」

講師 人文学部 助教授 加藤和哉

平成十一年度

山口大学人文学部公開講座

テーマ 「日本語と英語の文法研究」

期間 平成11年10月9日～11月20日の

毎週土曜日 午後1時30分～3

時 6回シリーズ

ところ 山口大学人文学部

日程・内容・担当講師

10月9日(第一回) 「日英語の音の法則の比較」

10月16日(第二回) 「21世紀の日本語の発音を予測する」

10月23日(第三回) 太田 聡 助教授

10月30日(第四回) 「一般化(規則性)を表す文

: 科学理論からことわざまで」

岩部浩三 助教授

11月13日(第五回) 「21世紀の日本語の文法を予測する」

11月20日(第六回) 「文法研究の最先端」

寺田 寛 講師

## 平成11年度事業計画

1. 第23回役員会(6月19日)
2. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会(9月の予定)
3. 「鴻文会会報第19号」発行(12月の予定)
4. 連合同窓会
5. その他

## 平成11年度予算

## 収 入 の 部

科 目	11年度予算額	10年度予算額	比較増減	摘 要
繰 越 金	139,029	967,689	△828,650	
会 費 収 入	210,000	2,210,000	△110,000	10,000円×210人(11年度入学者数)
名 簿 収 入	40,000	40,000	0	2,000円×20部
繰 入 金	0	0	0	
雑 収 入	40,000	10,000	30,000	預金利子、その他
合 計	2,319,029	3,227,689	△908,660	

## 支 出 の 部

科 目	11年度予算額	10年度予算額	比較増減	摘 要
会 議 費	100,000	100,000	0	役員会、その他
印 刷 費	300,000	300,000	0	会報印刷(4,500部)
郵 送 費	370,000	350,000	20,000	葉書購入、会報郵送料、通信連絡費
事 務 所 運 営 費	800,000	800,000	0	家賃、人件費、事務所経費(電気、水道、電話、町内会費)
事 務 費	100,000	100,000	0	会報発送などアルバイト謝金、消耗品、その他
寄 付 金 費	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励費
慶 弔 費	30,000	30,000	0	
記 念 事 業 費	0	300,000	△300,000	
積 立 金	400,000	1,000,000	△600,000	特別会計へ繰入
予 備 費	119,029	147,689	△28,660	
合 計	2,319,029	3,227,689	△908,660	

## 特 別 会 計

科 目	11年度財産	10年度財産	比較増減	摘 要
定額預金(S.63年)	600,000	600,000	0	
定額預金(H.3年)	1,000,000	1,000,000	0	
中期国債ファンド(H.10年)	1,001,637	1,001,637	0	
中期国債ファンド(H.11年)	400,000	0	400,000	一般会計積立金から繰入
合 計	3,001,637	2,601,637	400,000	

## 平成10年度事業報告

1. 第22回役員会 (5月16日)
2. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会 (9月1日)
3. 人文学部20周年記念植樹 (11月10日)
4. 「鴻文会会報第18号」発行 (12月24日)
5. 連合同窓会 (1月13日?)

## 平成10年度決算

収入総額 3,145,376 円      支出総額 3,006,347 円      残額 (次年度繰越金) 139,029 円

## 収入の部

科 目	当初予算額	決算額	比較増減	摘 要
繰越金	967,689	967,689	0	
会費収入	2,210,000	2,125,000	△85,000	10,000円×211人 5,000円×3人 (H9年度入学者)
名簿収入	40,000	2,000	△38,000	1冊
繰入金	0	0	0	
雑収入	10,000	50,687	40,687	預金利子、その他
合 計	3,227,689	3,145,376	△82,313	

## 支出の部

科 目	当初予算額	決算額	比較増減	摘 要
会議費	100,000	118,667	18,667	役員会、その他
印刷費	300,000	238,140	△61,860	会報印刷 (4,500部)
郵送費	350,000	371,171	21,171	葉書購入、会報郵送料、通信連絡費
事務所運営費	800,000	793,200	△6,800	家賃390,000円 (32,500円×12)、人件費 333,200円、事務所経費70,000円 (電気、水道、 電話、町内会費)
事務費	100,000	40,224	△59,776	会報発送などアルバイト謝金20,000円、消耗 品、その他
寄付金費	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
慶弔費	30,000	41,525	11,525	
記念事業費	300,000	300,420	420	人文学部20周年記念植樹
積立金	1,000,000	1,000,000	0	特別会計へ繰入
予備費	147,689	3,000	△144,689	
合 計	3,227,689	3,006,347	△221,342	

## 特別会計

科 目	11年度財産	10年度財産	比較増減	摘 要
定額預金 (S.63年)	600,000	600,000	0	
定額預金 (H.3年)	1,000,000	1,000,000	0	
中期国債ファンド (H.10年)	0	1,001,637	1,001,637	一般会計から繰入 利息1,637円
合 計	1,600,000	2,601,637	1,001,637	

平成11年6月19日、監査の結果過誤なく的確に経理されていることを確認します。

監事 藤井英樹  
北川健



文学部国文学科同窓会

平成十年度の同窓会は、三月十三日(土)午後三時よりホテルニュータナカ内の喫茶室「セーヌ・ド・パリ」にて行いました。会費は千円。当初は山口大学学生会館のレストランで開催の予定でした。打ち明けた話、出欠のご返事をいただく締切日までに、返ってくるのはそれほどんどが欠席の通知ばかり。今回は久しぶりに水本先生、関先生、石井先生お三方お揃いというのに、参加予定は小田会長ほか若干の今年度の卒業生と私だけという有り様。この数ではレストラン側は採算が揺れません。やむなく会場を上記の喫茶室に移し、茶話会に切り換えることにいたしました。サンルートに断りを言う(結構つらいものです。このあたりで庶務を変わってください。)参加者に通知する。それからポツリポツリ遅れて出席の連絡が届き、個人的な働きかけもあって、喫茶室には十五名が揃うことになりました。ケーキを食べたり、軽食をとったり、ビールを飲む者もあつたりで、お隣りやら向かいやらと話がはずみました。話の輪は小さいけれど。私の場合は、木戸さんの「若松出身の作家火野葦平との高校の文化祭での出会い」に時間を忘れて聞き入りました。十分小説になりそうなお話。宴会とは違う、酒の入らぬ茶話会もよいなと思いました。次回は、下関の功山寺で花見を兼ね三月末にやろうということにその場ではなりません。が、実現に漕ぎ着けられるかどうか。

関先生が梅光女学院にいらつしやる今がその好機なのですが。

関一雄教授の送別会

日本語文化論コースの関一雄先生は、定年により、平成十年の三月末をもってご退官になりました。昭和三十六年に山口大学にご赴任以来三十七年間、文理人文両学部で教鞭をとり、専門の国語学を講じて多数の卒業生を育ててこられました。



送別会での関先生

した。国文学研究室にはじまる草創期からの研究室の成長の過程は、先生を抜きにして語ることはできません。研究と教育指導そのいずれにも真摯に取り組み、私どもはその成果に教えられ、先生という存在に「安堵感」さえ覚えたものでした。

先生は、最終講義として後期最後の「日本語史」の授業をあてられました。山口大学での教師生活にそっくりいう形で幕を引きたい、遠路の卒業生に対する先生

流の気遣いでもありました。二月二日(月)の二時二十分からの七・八時限目。送別会も通常の同窓会まで兼ねる形でご了解を得た後からの企画でした。とは言え、会場の山口大学学生会館会議室は盛会で補助椅子を運び込むほど。

引き続き四時三十分から、場所を学生会館レストランに移して送別会がはじまりました。三十名近い教え子たち、山本文学部長や日本語文化論ほかの学部の教官の方々。懐かしい顔ぶれが揃いました。関先生を囲む送別会だからこそです。

人文の田中誠二教授の祝辞、第一回の卒業生の室田浩然さんのご挨拶、「昔の乙女たち」も次々立って思い出話を交えて感謝の言葉を一言、二言。ここまでの一筋の道と新たな門出に拍手を送りました。小柄な関先生の胸上げは各自の心の中で行いました。

最後に一言お詫びを。本項は、本来昨年の会報に記載すべきが一年遅れになりました。すべては添田の不手際です。皆さんご容赦ください。

\* 編集後記 \*

◇会報十九号をお届けいたします。今年山口大学創立五十周年という節目の年でもあり、同時に文学部の前身である官立山口高校開校八十周年の年でもあります。内容も、それにふさわしいよう工夫したつもりです。

◇ところで、冒頭、会長挨拶にあるように、大学も五十周年を機にして、新しい動きが始まろうとしています。大学の法人化の声が新聞で報じられたことで、いよいよ連合同窓会としての役割が問われることになりました。連合同窓会を法人として組織化することで、大学を支援することができればと、趣意書を発行させていただきました。同窓生のみならず、新時代の大学像に関心をもってくださればと思っています。鴻文会の会長が同時に連合会の会長に推挙され、支援を呼びかけることになった訳です。まだ具体的なイメージが示されているわけではありません。これからの大学像について、会員のみならずの声を期待しています。

◇新しい学部長に就任された田中晋先生が同窓会の名誉会長になりました。挨拶文の中に写真がそえてあります。今後ともよろしくお願いいたします。

◇今号に原稿を寄せて頂いた方々に厚くお礼申し上げます。卒業生からの寄稿欄には、それぞれの持ち場における近況はもとより、大学時代の回想なども書いて頂ければと思っています。また、研究室の情報、同期会の様子なども、お寄せ頂き、今後の会報充実のために、役立てたいと思っています。ご協力ください。

(大野記)

計 報

川端 新 助教

一九九七年四月に人文学科歴史文化講座(国史学専攻)にご着任された先生には、一九九九年十一月十二日、急逝されました。(享年三十四歳)。謹んでご冥福をお祈りいたします。